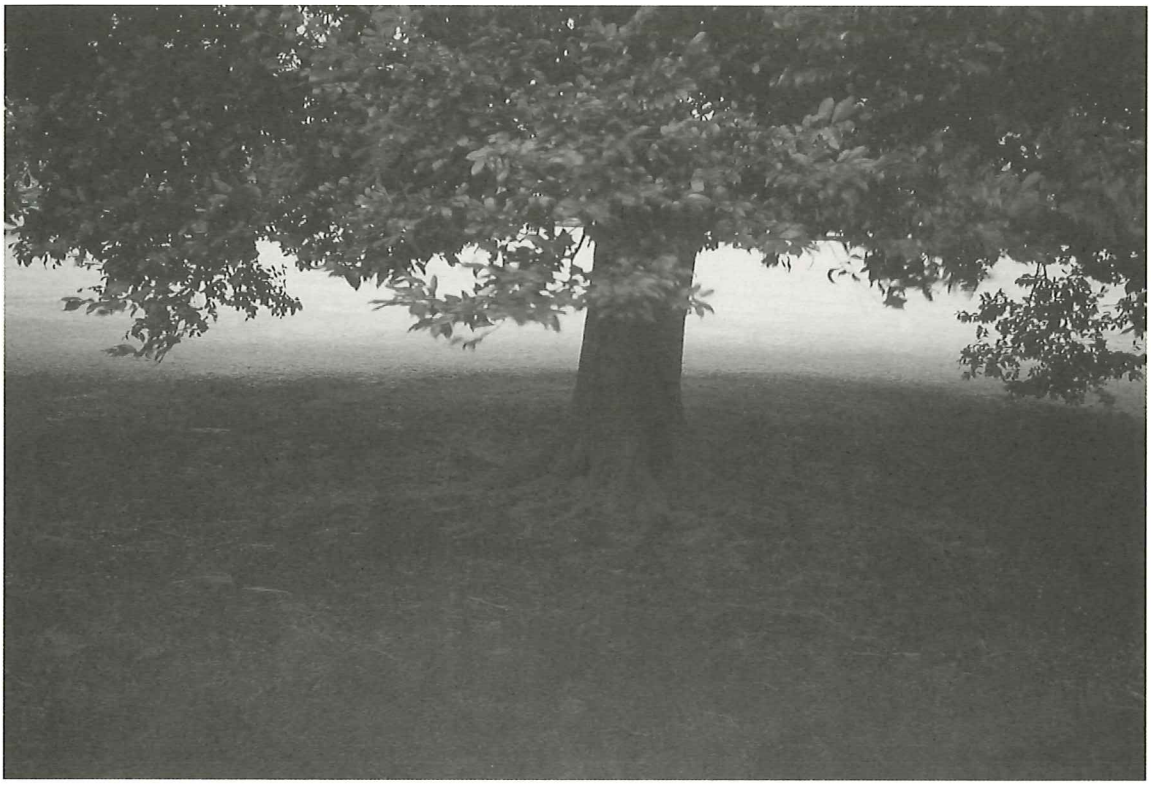
清沢満之の生涯に学ぶ

脇本平也
wakimoto tsuneya

宗教学研究者としての私は、できるだけ私意を排して客観的に複数の宗教現象を研究しようと努めてきた。その一翼に、清沢満之研究も位置を占めていた。清沢満之という宗教的人物を研究対象の一つとして向こう側に置き、ある程度距離を保ってこちら側から観察してみる。それが研究姿勢の基本であった。

具体的には、彼の思想・信仰を生涯の人生経験との絡み合いのなかで論理的に捉えたいと試みた。私なりのその捉え方を世に問うて、まず研究者の間での検討にゆだねて批判を仰ぎ、次いでできるだけ多くの人々の承認賛同を得たいと願った。このような研究姿勢を建て前として清沢満之について書いてきた。誰が見てもあまり異論の出ないような、その意



味でできるだけ客観的な清沢満之像を描き出したい。そういう志向のもとに進められた宗教学的作業であった。

「私意を排して客観的に」と言ったが、宗教学では、これは「できるだけ」という相対的程度問題に止まらざるをえない。自然科学のような実験的検証は不可能だからである。のみならず、研究対象として選択すること自体が、すでに私意による主観的行為ということになるからである。その意味では、私の清沢満之研究にも潜在的な主観的動機づけがあった。彼の信仰・思想・生き方に魅力がありそうだという予感、そこに学ぶべき点を見いだしたいという期待などである。

今回、「清沢満之の生涯に学ぶ」という標題を与えられたので、宗教学方法論上のこれまでの制約を外して、その潜在的な主観的動機づけの顕在化を試みることにする。つまり、研究者というよりも、一個の人間として満之のどこに魅力を感じ、何を学んでいるか、あるいは学べないでいるか、これを素朴に振り返って整理してみる。整理の手掛かりを、建峰・骸骨・石水・臘扇・浜風という五つの号に求める。彼自身が示したとおり、満之の生涯はこれらの号によってそれぞれに特徴のある五つの時期に分けられるからである。その時期ごとの満之をめぐって、私の率直な感想を述べてみたい。

●（在名古屋時）建峰

満之は、自分で生まれたくて名古屋に生まれたのではない。この母・この父を選んで生まれたわけではない。たまたま生まれてみたら尾張藩軽輩士族の子だった。だから明治になると貧乏で、向学心を満たすには大谷派育英教校に入る外なかった。と、こういう角度から見ていけば、満之のみならず、人間の存在そのものは当人にとっては偶然から始まる。またその生涯も、その時々の偶然に支配される。生まれるという語が受動形であるように、己の出生に能動的に関与できる人は皆無である。その後の成長過程でも受け身は続く。反抗期を経て個人の自由などと言い出すが、果たしてどれほどの自由が可能か、厳しい現実の環境条件の下では怪しいものとも言えそうである。

確かに、人は一生を通じて偶然の支配を避けては通れない。いつどこでどのような出来事に出会うかわからない。その出会いの偶然は、自分にとってプラスのものもあればマイナスのものもある。その一方を選んで他方を捨てるという、都合のよい選択の自由は与えられていない。自の側からの干渉を完全に拒否する、絶対に他なるものとして、偶然ははたらく。かくて、一寸先はどうなるかわからないのが人生だ、という見方にも理があることになる。

とは言え、他方から見れば、人はそれぞれに独自の存在である。生まれた途端に、各人が他人とは違った可能性を己の内に蔵している。近ごろでは、遺伝子科学でも証明されるらしい。これを現実化して個性を形成・発展させるのは、他ならぬ自分の責任である。いかに偶然に翻弄されるにせよ、なおかつ、少なくとも相対的に意志の自由とか主体的決断とかは可能である。というよりもむしろ、人生行路のその時その時に、自ら選んで舵を切りつつ前進することが要請される。満之は絶対的所与としての境遇に甘んじつつ、自己の責任において進路を決断する。大谷派育英教校に入れば、この境遇の要請に応えるべく最善を尽くす。結果として、たまたま東大留学生に選ばれれば、この偶然の機会を最大限に生かして、新知識の吸収に没頭する。という次第で、満之の生き方の主体性は見紛う方もない。なるほど一寸先は闇だが、足元の現在を、明々白々に照らし出して至誠の対応を試みようと努力することはできる。建峰時代の満之はこれをやっている。その延長線として自然に伸びるコースの上に、京都中学校長赴任が位置していた。

この時期の満之から私が学びたいのは、偶然とか出会いとかといった、こちらから関わりようのない、絶対に他なるものについてである。ある程度、相対的に自由な主体として

の自己とその責任という問題につながる。

●（在京都時）骸骨

京都赴任の動機をめぐって議論もあるが、満之はすでに骨の髄まで宗門人だった、というだけで十分ではないかと思う。社会心理学めかして言えば、大谷派僧侶としてのアイデンティティが確立していた。そして、僧侶たるものの本分を自らに問い直す営みが、禁欲修行であり、宗教哲学研究であった。ここでの満之の特徴を、私は極めて理性的・論理的実験の精神のうちに見いだしたい。

聖道門・難行道の禁欲修行が、浄土門・易行道の真宗大谷派の立場に違背することは百も承知の上で、しかもなお、満之は禁欲主義の実験に踏み込まざるをえなかった。それは、満之の求道心が熾烈で正直だったからだと思う。東京大学で西洋哲学を専攻した若者が、初めから一文不知の無智の輩に同じくすることなどできるはずもなかった。まずは、法をよくよく学すという順序を通らずにはおられない。法を学すとは、仏教伝統の修行道に身を投じることであり、仏教を含む宗教の道理を探求することであった。このような論理的に筋の通った体験的実践こそ、骸骨の真骨頂であった。

学ぶということが真似ぶということであるならば、私には骸骨を真似することはできそうもない。あれほどの禁欲修行はもちろん、徹底的・主体的に考え抜く哲学も私の柄ではない。つまるところ私を動かしているものは、求道心ではなくて、傍観的な好奇心ということになりそうである。満之は私にとって、やはり遥かかなたに仰ぐ人である。

●（在舞子時）石水

結核療養と白川党運動の時代である。死をめぐる想念と宗門の理念とがここでの満之の主題となる。

死は、偶然と同じく、人間にとって普遍的問題である。何人も避けて通るわけにはいかない。いつかは必ず死ななければならない。そのいつを、人は自分で決めることも最終的にはできない。病気などである程度死期を予想することはできる。あるいは自殺を図ってこれを決めようとすることはできる。しかし、予想は外れたり自殺は失敗したりで、厳密に言えば、死期を最終的に自由に決定することはやはり不可能ということになる。その意味で、死もまた干渉を拒否して自に襲いかかる絶対に他なるものの性格をもつ。偶然や死が人間にとっての限界状況といわれる所以である。

その死を、喀血状況を記録しながらまさしく自分のこととして、満之は近々と凝視する。この養痾が、ほぼ自力の迷情を翻転する転機となる。しかし、宗門人としての赤誠に動かされて大谷派革新運動に熱中する。やがて熱中からふと醒めて、石水の時代を終える。

死は、私にとってももちろん大問題である。少年期に出会った近親者五人の死、いわゆる学徒出陣時の自分の死の予想などが宗教学を志す機縁ともなったように思う。復員後から今日まで、幸いに大病はなくまずまずの健康で八十三歳となった。戦死した友達、父母をはじめとする親類縁者、恩師以下、同学の先輩後輩など、この歳ともなれば親しい人々の死はもう数え切れないほどである。折に触れ、繰り返しその方たちの死のことを想う。近ごろは、とくに若い研究仲間たちの死が重い。他人ごとではなく、歳からいっても間もなく私は死ぬ。状況を異にする石水にも学びながら、私も自身の死を想う。石水は、不治の病躯を駆って宗門運動に尽瘁した。この宗門に当たるものを、私は果たして持ち得たか。省みて自問することの一つである。

●（在東京時）臘扇

この号は、東上以前の自坊における日記の表題「臘扇」に始まる。信境の展開をそこに記録して東京に上り、真宗大学初代学長・雑誌『精神界』主幹として活動する。やがて長男、妻に先立たれ、学生のストライキ運動に責任をとって大学を辞し、大浜（愛知県）の自坊に帰る。満之の生涯のうちで密度最大の時期といってよいであろう。それだけに私の感想も多岐にわたるが、以下、むしろ焦点を

「臘扇記」の一文に絞ってみる。

自己トハ他ナシ　絶対無限ノ妙用ニ乗托シテ任運ニ法爾ニ此境遇ニ落在セルモノ即チ是ナリ

この文句に接して、私の脳裏にいつも浮かび上がってくるイメージがある。風に吹かれて木の葉がひらひらと池の面に落ちてきて、落ちたところで波紋を描いて、その波紋が拡がって、やがて消えていく、という動きのある連続画面である。木の枝や、背景の青空や、ぼんやりした岸辺などの見えることもあるが、主役は葉っぱである。必ず黄葉で、一枚のときも数枚のときもある。「落在」という語の喚起力によるイメージかもしれない。

葉っぱの翻る姿や波紋の大小の拡がりなどに、満之の生涯の主要な幾齣（いくこま）かが重なって見えてくる。出生や境遇や希望や努力や思索や反省や行動など、その時その時の満之の生きる姿がそこに映し出されるような気がする。裏を見せ、表を見せて散る木の葉の動き、落在した水面の一点から力の限りに拡がり、やがて力尽きて消えていく波紋、それらが満之の生の一齣一齣を象徴するかのように私には見えてくる。満之だけではない。私と親しかった人々の死、とくに兵隊から還らなかった親友たちの姿までが、なぜかこのイメージに重なる。他人ごとではない。私自身のこれまで生きて来た道、これから先の行く末、その果ての死までも、このとおりなのだろうかと思えてくる。

●浜風

満之は、一九〇三（明治三十六）年六月六日に死ぬ。その四十日ほど前の四月二十六日の日記に、実父と養父との会話から思いついて「浜風」の号を作製した、と書いている。さらに六月一日、暁烏敏宛の手紙に記している。

「浜風」ト云フ号ハ近頃ノ得物デアリマス　大浜ハ風ノ多キ処ト云フ話カラ取リマシタガ丁度小生ノ如キ半死半生ノ幽霊ニハ適当ト感シテ居リマス　此一号ガ又小生ノ今日迄ノ諸号ヲ総合シテ居マスノモ自分ニハ面白ク存シマス

諸号トハ（在名古屋時）建峰（在京都時）骸骨（在舞子時）石水（在東京時）臘扇ノ四ツデアリマス　此デヒユードロト致シマス

満之は、前年の六月と十月に相次いで長男と妻を亡くし、大浜に帰ったこの年の四月九日にはまた、可愛い盛りの五歳の三男に先立たれている。周りに死の影が立ちこめている。始まりは、当時、死病とされた自分自身の肺結核であった。ようやく時到り、幽霊の浜風となってヒユードロと自分も吹き消えていくことができる。いまや時は熟して自己の死が実現する。この実感に裏打ちされた達観の境地とでも言えばよいのだろうか。臘扇から浜風への転入とでも言えそうな機微を、私はここに感じ取る。

白い壺の絵と見えていた。それがふとした機会に反転して、向き合った二人の女の黒い横顔に見える。ゲシュタルト心理学で例に引かれる図柄と地との反転である。先に述べた「落在」で喚起される私のイメージにも、浜風に吹かれて図柄と地との反転、つまり主役の交替が起こる。主役は葉っぱと見えていたものが、実は引き立て役だった。本当の主役は、木の葉を散らし池の面の波紋を揺らす風だった。風は描かれていない。風そのものは描くことができない。散るという描かれた図柄の背景に、描かれない地として風がある。この風こそが、自己を落在させる絶対無限の妙用（みょうゆう）の風なのだ。自己を図柄として浮き出させる地の風に乗って、満之は浜風となる。臘扇の自己を超脱して風そのものとなる。もはや臘扇の自己は溶け去ってイメージの手は届かない。浜風のみが虚空を吹き渡る。ヒユードロのみの虚空となる。どうも言葉にはしにくいが、このような浜風に私は目下憧れている。若いころ、形式的だなと思った有余（うよ）涅槃と無余涅槃との区別は、やはり大切なのだといまは思う。

（わきもと　つねや・国際宗教研究所理事長、東京大学名誉教授）
著書に『評伝　清沢満之』法蔵館